

◆ 長光寺/柴灯護摩・人形供養に参加して ◆

平松 清廣

令和元年11月24日(日)13時からお焚き上げ供養が始まりました。金子弘信住職が導師を務められ、修験者数名が護摩壇に火をつけると煙が渦を巻いて空へ。参拝者から納められた、ひな人形や日本人形・ぬいぐるみ等の人形が次々とくべられていきました。霊験あらたかな雰囲気の中、参拝者は家内安全や無病息災を祈願しました。

境内一带に「長光寺マルシェ」としたお店が二十数軒立ち並び賑やかに盛り上がっていて、地元の知り合いのお店で“豚汁セット”を美味しく食べました。また、自宅の博多人形等を持って行って供養をして頂きました。

本州最南端にあり、聖徳太子が植えられたといわれる、天然記念物のハナノキもすっかり紅葉してきれいでした。



お焚き上げ供養・護摩木の煙の凄さ

◆ 近江八幡の古民家見学ツアーに参加して ◆

～ 旧伴家住宅・西川庄六邸 ～

松本 博

令和元年11月30日(土)午後1時30分より前県立大学教授の濱崎一志先生より市指定文化財の旧伴家住宅と県指定文化財の西川庄六家住宅についての講演会があり、ご報告させていただきます。

まず、「町家」についてですが、町家であるための条件は何か「道路に面していること」。道路に面していないと商売ができない。室町時代の終わり頃は中土間式町家といわれる町家だった。家の形は1列3室型が基本形になる。道路に面した前のほうが公的な部屋で、後ろのほうが私的な部屋になっている。3部屋が足りなくなると2列5部屋。部屋が多くなると中の部屋が暗くなるので通風採光にする必要から質の高い空間をつくるために見越しの松を植えた。見越しの松は豪商のシンボルともなっている。

京都では間口に地子(税金)がかかるため間口を極力狭くしてうなぎの寝床になっている。それに対して八幡商人は間口を無視するわけではないが豪商のためかあまり気にしていない。伴家は新町通りがメインだったので入口は新町通りに面していた。

プロジェクターを使った映像による説明がなされた。

1. 背割りの溝と古式水道の分布(地質のちがいを色分けした地図による説明)
2. 洛中洛外図(京都の絵図)
3. 江戸時代の豪商の住まい
4. 近江八幡の豪商の住まい
5. 断面にみる地域 彦根の町家と近江八幡の町家との比較を図で説明
6. 新町通りの町並みの図
7. 旧伴庄右衛門古図 新町通りに面した古い建物の脇に新しい建物をつくった。
8. 図書館の配置図
9. 西川庄六邸図



(寒椿)

説明のあと、見学会となり旧伴家住宅3階と西川庄六邸の中を見学しました。3階は太くて長い松の木が多く使われ2階は樺の木が多く使われていました。西川庄六邸に移動、なぐり仕上げ板塀を道路から見て右側3枚目が通用門になり塀の前の「駒寄せ」と板塀をはずすと隠れていた門は観音開き、門から見る内部は奥行きがあり天井が高く3階建てくらいの高さがあった。さらに奥には広々とした庭があり、特におおきな紅葉真っ盛りのモミジと松の木が寄り添うように植えられて、赤と緑の色のコラボレーションが目焼き付き、印象に残った。